



ラケル

レアはやコブとラケルの結婚初夜に、父の計略によって、妹ラケルと入れ替えられて、ヤコブの床に送られました。親として娘は可愛かったでしょうけれども、家や一族の繁栄、維持のための道具でもあったことが分かります。

聖書は「レアは優しい目をしてしたが、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていた」と書いていて、美的魅力でレアは妹に劣ると記されています。女性の容貌の優劣を誰が決めるのでしょうか、と腹立たしく思います。このようにあからさまに記録に残されたレアに、なぜか親近感を持ってしまいます。とりあえず、目が優しいのだから、良いじゃないかと気を取り直しましょう。

レアにとってもヤコブのような「気は優しくて力持ち」である男性は魅力的だったと思います。ですから、彼の第一夫人になってレアは嬉しかったと思います。けれども、夫



レア

の失望、ラケルの悔しさを理解したうえで、夫婦関係を保ち、さらに愛情を得ることは大変なことだったでしょう。ヤコブを愛して、忍耐し続けます。レアは身体的に健康だったようで、息子6人、娘1人を授かりました。子どもを産むたびにレアは子どもの名前に託して、苦しみと喜びの心境を、神に祈りながら、隠さず伝えています。祈らなければ耐えられなかったのでしょうか。

- 長男 主は私の苦しみを顧みてくださった
- 次男 主は私が疎んじられていることを耳にされた
- 三男 これからはきっと、夫は私に結びついてくれるだろう
- 四男 今度こそ、主をほめたたえよう
- 五男 主はその報酬をくださった
- 六男 今度こそ、夫は私を尊敬してくれるでしょう

ラケルは旅路の途中で難産のため亡くなり、その場所で埋葬されました。最愛のラケルを失い、ヤコブはその遺児を偏愛してしまいます。レアは多くの子どもたちの母として育児に励みます。ヤコブはレアとラケル、側女たちの子どもを加えて合計12人も男子を持ちます。彼らがイスラエル12部族のルーツとなっていきました。レアは先祖の墓にヤコブと共に埋葬されました。

ダンテの「煉獄編」にレアを夢に見た情景が歌われています。

草の野に一人のうるわしい淑女が花を摘んでいた。

彼女は名をレアと名乗って歌った。

「我が身装う花冠を作らばやと、わが手の休む暇なし。

わが妹はひねもす座して 鏡前を離れない。

妹は見ることもて、われはなすこともて、

おのが心を満ち足らはす」(寿岳文章 訳)

ダンテの神曲によって、二人は信仰のモデルとなり、ラケルは修道女的な黙想のシンボル、レアは活動的な愛のシンボル、または、ラケルは信仰、レアは愛の象徴と見なされたようです。



ラケルとレア Dante Gabriel Rossetti

上の二人の彫像はミケランジェロによるもので、ルネッサンス芸術の最盛期の教皇・ユリウス二世の墓所(聖ピエトロ寺院)に、モーセの左右に飾られています。